ラパレラ・エスタ

水飴ほたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラパレラ・エスタ

【Ｎコード】
Ｎ５４６０Ｍ

【作者名】
水飴ほたる

【あらすじ】
第１７回電撃大賞の一次選考でボツった作品その１です。
今後の方針のためにも感想などを頂けると幸いです。

第1話

この世界ではない、どこか別の世界の物語。

とある家の一室で、一人の男が大きなキャンバスに絵を描いている。彼の名は、エリック。作務衣のような紺色の服を身にまとい、ボサボサの金髪頭で一心不乱に絵を描いている。年は二十代前半だろうか、全体的に童顔な顔立ちのため、随分と若い印象を受ける。しばらくして、エリックが筆を止めた。

「…お腹が空いたな。」

エリックがそう呟くと、突然、隣の部屋に置いてあった冷蔵庫の扉が開いた。冷蔵庫の中に置いてあった、ラップに包まれた夕飯の残りの焼きそばが、独りでに皿ごと電子レンジの中に入っていった。タイマーが自動的に動き始め、これまた自動的にスイッチが始動し始めた。やがて、数分して、加熱が終わる頃、レンジの扉が開いた。レンジの扉が開いたかと思うと、中に入っていた焼きそばが、途中、フォークと水の入ったペットボトルも連れて、エリックのいる部屋へと飛んできた。やがて、それらはエリックの脇に置いてあった小さなテーブルへと置かれ、ホカホカに湯気の立った美味しそうな焼きそばを、エリックはフォークで装い、口元へと運んだ。

「…うん、美味い。」

それからしばらくの間、エリックは焼きそばを黙々と食べていた。数分後、焼きそばを全て食べ終え、再びエリックは絵を描き始めた。やがて、またしばらくして、エリックが筆を止めた。

「…青色が足りないな。」

今度はエリックの後ろにあった、百ほどはある碁盤上のマスのように仕切られた小物入れの一つが勢い良く開き、その中に入っていた青色の絵の具がひょっこりと顔を出し、先程と同じようにエリックの元へと独りでに運ばれていった。どうやら、この男には自身が思

い描いたものを自動的に動かせる能力があるらしい。
「…うーん、もうちょっと赤みが欲しいな…。」
不満を漏らし、先程と同じように後ろの小物入れの一個を念じ開ける。小物入れがガサガサと音を立てた。
「あれ？」
エリックが不審に思い、再度小物入れを左右に揺らす。
「まいったな…。」
エリックがそう溜め息を漏らすと、棚の脇に書かれていた『？』というボタンを押した。
「ぎゃあああああ！！」
冷蔵庫のあった部屋とは別の部屋で、何やら女の子の悲鳴が聞こえた。やがて、向こうの部屋から誰かが飛んできた。
「もー！　いい加減にしてよ、エリックさん！　何で私を呼ぶのにいちいち電流を流すのよ。口で呼べばいいじゃない！　口で！」
現れたのは、妖精だった。体長は約三十センチメートルほどで、四枚の透明な羽に、エメラルド色の服を着ていた。そして、何故か、首に、首輪のような物が付いていた。どうやら先程の電流は、丁度この首輪から流れ出たもののようだった。
「ははは。ごめんよ、アリス。ちょっと声が掠れててさ。呼べる自信が無かったんだ。」
怒りの矛先として向けられたエリックは、随分とあっけらかんとした様子で答えた。
「で？　用件は何なの？」
アリスが腕を組みながら、ひどく不機嫌な様子で尋ねる。
「あぁ、あそこの箱の中に、赤色の絵の具があるか見てきて欲しいんだ。」
エリックが後ろにある小物入れの一つを指した。確かに、小物入れまでの高さは三メートル程あり、容易には確認できるような場所ではなかった。
「あそこね。分かったわ。ちょっと見てくる。」

アリスが了解し、羽ばたいて箱へと向かい、箱の中を覗き込んだ。
「えぇ、確かに無いわよ、赤色の絵の具。」
「そっかぁ。分かった。ありがとう。アリス。」
エリックはがっくりとし、腰を下ろした。一方、アリスは小箱を棚に閉めて、エリックの元へと降りてきた。アリスが視線を目の前にある大きなキャンバスへと向ける。その大きさは壁一面を占め、優に縦横二、三メートルはあるかと言う大きさだった。その大きさに圧倒され、アリスが呆れた様な声を上げる。
「でも、ホント、エリックさんも飽きずによく描くわよね。一体、何なの？　この絵？」
「あぁ、これかい？　これは、『真実の絵』さ。」
「『真実の絵』？」
アリスがエリックの言葉を復唱する。
「あぁ、僕はこの絵に『世界の真実』を描き表したいんだ。」
「…ふぅーん。」
アリスが、あまり関心が無さそうな声を上げる。
「まぁ、この絵が完成したら、その首輪も外してあげるし、妖精界にも帰してあげるから。」
「ホント！？」
アリスが歓喜の声を上げる。
「それで？　この絵はいつ頃完成する予定なの？」
「ざっと六十年後くらいかな。」
その瞬間、エリックは近くに置いてあった絵筆で思いっきり頭を叩かれた。
「冗談じゃないわよ！　長すぎるでしょ！　六十年って。どんだけチンタラこの絵を描くつもりなのよ？」
叩かれたエリックが、よろめきながらゆっくりと起き上がる。
「イタタタ。いや、違うんだよ。」
「何がよ。」
アリスが憤怒の表情で聞き返す。

「実は、この絵は『真実の絵』のほんの一部分で、本当は、この絵と同じ大きさの様々な絵を、何十枚と併せる事で、初めて『真実の絵』と名づけられた一枚の大きな絵が完成するという、壮大なビックプロジェクトになっているんだよ。」
「…で？　それが完成するのが六十年後くらいと？」
「…はい、そうです。」
怒りのオーラが立ち込めるアリスに圧倒されながらも、エリックが頷く。すると、玄関から呼び鈴が聞こえた。
「あ、来客だ。はいはーい。」
エリックが立ち上がり、玄関へと歩き始めた。すると、突然、地面の底からエリックの体の周りを黄金色の光が包み始めた。エリックがその光に包まれると、今までボサボサだったエリックの髪がみるみるうちに独りでに整えられていった。そして、それと同時に、これまで着ていた衣服も、ボロボロの作業着から、黒いスーツに白いYシャツというフォーマルな衣装に変わっていった。玄関に辿り着く頃には、先程までの無作法な姿はどこにも無かった。
「はい。こんにちは。」
爽やかな笑顔と共に、エリックは玄関のドアを開けた。

「ホント、エリックさんって、何者なのかしら。」
先程までの一連の行動を後ろで見ていたアリスが、訝しげに呟いた。
やがて、玄関にいたエリックが何やら一枚の封筒を持って、こちらへやって来た。
「はぁーっ。また、水道代の請求書だよ。さすがの私も水ばっかりはねぇ…。」
アリスがじっとエリックを見つめている。その様子にエリックが気付いた。
「どうしたんだい。アリス？」
呼ばれたアリスは、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

「…別に。青海苔。歯に付いてるわよ。」
憮然とした態度でアリスがエリックに投げかける。言われたエリックが急いで鏡を覗いた。
「はっ！　ホントだ。だからさっきの郵便の人、半笑いだったのか…。うわっ恥ずかしい…。」
エリックが洗面台に行き、歯を磨く。しばくして衣服を作業着の姿に戻した格好で、部屋へと戻り、再び絵を描き始めた。
「ホント、よくやるわよね。」
アリスがエリックのそんな様子に呆れながら呟く。それから、アリスは嵌め殺しとなっている窓の側へと、身を寄せ、窓の外の景色に目をやった。外では、実に晴れ晴れとした青空が辺り一面に広がり、お洒落な衣装を身にまとった少女達が、楽しそうに街中を歩いていた。そんな様子を見ていたアリスが、人知れず寂しげな表情を浮かべた。
「…とりあえずここまでにしておこうか。アリス！」
エリックが窓際にいるアリスに声を掛ける。しかし、アリスは気付かず、ただ只管に窓の外を眺めていた。
「…アリス？」
不安な表情でアリスに近寄ろうとした時、アリスが近付いて来るエリックに気付いた。
「…あ、あれ？　エリックさん？　何？　どうしたの？」
慌てふためきながら、しどろもどろの滑舌で答えるアリス。その目には若干の涙が滲んでいた。
「アリス…。」
「あ、いや、ちょっとここから窓の外を見てたら寂しくなっちゃってさ。あ、別に気にしなくていいのよ。どうせここから出られないんだし。あははは。」
無理に笑おうとするアリス。しかし、笑顔であっても心の奥底では泣いている事は誰の眼にも明らかだった。
「…よし！」

エリックが突然力強い声を上げる。
「アリス、今から一緒に買い物に行こうか。」
「…え？」
「ちょうど、赤色の絵の具を買いに行く所だったし、さすがに一週間もずっと家の中にいるのは健康に良くないからね。」
エリックの突然の提案に、アリスが驚きの表情を浮かべる。
「え…？　でもいいの、エリックさん？　…私を、外に出したくないんでしょ？」
「いや、出したくないというか、出すとマズいというか…。」
曖昧な表現でお茶を濁すエリック。その言い回しにアリスが疑問を抱く。
「出すとマズいって、何が？」
「はは、まぁいいじゃないか、そんな事よりもアリス。これを被ってくれないか。」
エリックが徐に、近くに置いてあったバケツを手に取り、その中に入った液体を、アリスに向かって真っ逆さまに被せ始めた。エリックの突然の行動にアリスが悲鳴を上げる。
「きゃあ！　ちょ、何をするのよエリックさん！　…って、あれ？　何だか体が透けてきた。」
バケツに入った液体を被せられたアリスの体がみるみる内に透けてきた。
「これは『イレイシング　ウォーター』と言って、文字通りこの液体を塗ったものの姿を見えなくさせる事の出来る液体なんだ。」
「へぇー。わー凄いわね、これ。」
アリスが、透けた自分の体を不思議そうに鏡で見ている。
「その姿なら他の人達にも気付かれる事なく行動出来るからね。じゃあ、出発しようか。」
こうして、二人は街中へと出掛けていった。

第2話

ごく普通の街並みを、エリックとアリスの二人が歩いている。道中、アリスがエリックに質問を投げかけた。
「でもエリックさん、買い物に行くっていっても、お金はどうするの？　見たところそんなにお金を持っているようにも見えないし、かといってエリックさん、働いているようにも見えないからさ。どうするのかなって…。」
「フフフ、それなら心配ご無用。僕にはこいつがあるからね。」
エリックが財布から虹色のキャッシュカードを取り出した。
「何、このキャッシュカード？　凄い綺麗ね。」
アリスがエリックの持っているキャッシュカードをまじまじと見つめる。
「これは『レインボーカード』。これを持っていると、銀行で個人の所有残高に関わらず好きな金額だけお金を下ろせるのさ。」
「えー！　そんなのズルいじゃない。」
アリスが至極当然な反応を示す。
「ただ、勿論それに対するハードルも凄まじく高くてね。通常のキャッシュカードでお金を下ろす時は、その暗証番号が四桁だろう？」
「え、えぇ…。」
「ところが、この『レインボーカード』は暗証番号が一万桁もあるんだ。しかも、全ての番号をミスする事なく一発で、十分以内に入力しなければ、お金を引き出す事が出来ないんだ。」
「えー！　そんなの出来る訳ないじゃない。」
「ところが出来るのさ。」
そんな話をしている内に、二人は目的地の銀行へと到着した。入り口をくぐり、エリックが銀行員の一人に先程のキャッシュカードを見せると、銀行員は慌てた様子で支店内の奥へと向かい、誰かを呼びに行った。しばらくして、奥から支店長らしき男が現れ、二人は

行内の奥へと案内された。支店長の男が突き当たりにある部屋のドアを開けると、室内にはＡＴＭが一台ぽつんと置かれていた。支店長は二人を室内へと促すと、軽くお辞儀をして、部屋を去っていった。
「それで？　どうするの、一万桁？」
アリスが両手を腰に当てながら、溜め息混じりにエリックに尋ねる。
「フフフ、まぁ見ててごらん。」
エリックは不敵な笑みを浮かべ、静かに目を閉じた。やがて、何やら呪文のようなものを唱え始め、両手を、球体を描くように動かし始めた。
「出でよ、暗証イカ！」
エリックが名を告げると、手の中からポンと音を立て、丁度、掌よりも少し大きいくらいのイカが現れた。
「へへ、ダンナ。いつもすいやせんねぇ。」
暗証イカはとても卑屈な態度だった。
「あぁ、暗証イカ。いつものヤツを頼む。」
「へへ、任せてくだせぇ。あらよっと。」
威勢の良い掛け声と共に暗証イカは、十本の足と腕を使って、物凄い速さで画面に映し出されていた数字番号を連打し始めた。一連の流れを横で見ていたアリスには、暗証イカが行なっている腕（と足）の動きが全く見えず、ただ唖然と、彼の取っている行動を見守るしかなかった。数分後、『入力が完了しました』という音声案内と共に、金銭の出し入れ口から紙幣が何枚か出てきた。
「九分四十二秒か。うん、まずまずだ。ほら、暗証イカ。報酬の海老の袋詰めだ。」
エリックが暗証イカに、海老がぎっしり入った袋を手渡した。暗証イカがそれを受け取る。
「へへ、いつもすいやせんね、ダンナ。それでは、あっしはこれで。」
「うむ、またよろしく頼む。」

暗証イカは二、三度頭を下げ、来た時と同じようにポンと音を立ててあっという間にいなくなってしまった。一連の行動をアリスが呆然と見つめる。
「…さて。」
エリックが紙幣を取り出し、財布へと収めた。そして、まだ呆気に取られたままのアリスに向かってフリップボードとマジックペンを手渡してこう尋ねる。
「では、アリス。このボードに質問をどうぞ。」
アリスは頭を抱えながら、こう返答する。
「あー、待っててね。今まとめるから。」
やがて、しばらくしてアリスが質問を書いたフリップボードを、エリックへとつき立てる。アリスが書いた質問の内容は、次の通りだった。
?暗証イカって何？
?何で暗証イカは、一万桁を十分で打てるの？
?っていうか、あれだけの仕事をさせておいて報酬が海老の袋詰めって、アンタ何ソレ？
「はい！　どうなの？　エリックさん！」
「ふむ、当然の質問ばかりだ。ではまず順番に答えていこうか。まず?に関して。そもそも、このキャッシュカードが手に入った時に真っ先に思った事が、絶対に自分では入力出来ない、という事だった。なぜなら、人間の指先では明らかに入力時での効率が悪いからね。」
「うん。」
「そこで考えたのが、腕（と足）が十本あるイカに人間並みの知能と技能を与えて、暗証番号の入力を行なえば、腕（と足）の数が多い分、人間と比べて入力時の効率が十倍になり、一万桁の入力も可能になるのではないかという事だった。」
「…はぁ。」
「そこからはもう簡単だった。質問の内容が?に移るけど、海に行

って適当なイカを一杯拝借して、彼に人間並みの知能と技能を与えた。それから十本の足一つひとつに押す数字の役割を決めて、後は十分以内に一万桁を打てるようにひたすら練習を繰り返したというだけの話だよ。」
エリックの話す方法論に、アリスは終始頭を抱えていた。
「はぁ…。話を聞いた所で、また新たな疑問点が湧いてきたよ。でも！　それだけの仕事をさせておいて報酬が海老の袋詰めってのはカワイソ過ぎるよ！」
アリスが不満に満ちた表情で叫ぶ。
「そんな事はないさ。イカの世界で海老は、超贅沢品だからね。しかも彼は今育ち盛りのお子さん達を多数抱えていて、あの報酬としての海老の袋詰めは、奥さん共々、随分と喜んでくれているらしいよ。」
しれっと言い放つエリックに対して、アリスは言葉を失っていた。
「はぁ…。完全にこの人の一人勝ちだよ。まぁいいや。みんなが満足してるのなら。」
「さぁ、それじゃあ買い物に向かおうか。」
エリックがドアへ近付き、ドアノブを捻った時、窓口の方から何やら悲鳴が聞こえた。その声にアリスが反応を示す。
「な、何？　今の悲鳴？」
「どうやら、何かあったみたいだね。」
そうして二人は、悲鳴のあった窓口へと向かっていった。

二人が窓口のある店舗部分に戻ってみると、ＡＴＭの行列の途中で、男が背中から包丁を一突きに刺されて死んでいた。男の周りを大勢の人達が取り囲み、皆一様に不安な表情を覗かせている。
「どうしたんですか？　一体何があったんですか？」
エリックが、たまたま側にいた老人に話しかけた。
「何かよう分からんのだけど、ＡＴＭに並んでいた男が突然、後ろ

にいた人間から刺されたんだよ。そりゃもうブスリと。」
「その刺した人はどんな人でしたか？」
「さぁー。グレーの帽子に、黒いコート、おまけに黒のサングラスっちゅう、ごっつい格好しとったから、どんな人相だったかはほとんど分からんわ。」
「そうですか。」
老人から情報を取り入れ、エリックは再び死体に視線を送った。死体の近くでは店内の銀行員達が一般客を近づけないように規制線を張ったり、警察に連絡をしたりして、皆慌しく動いている。
「どう、エリックさん。何か分かったの？」
つい先程まで死体の近くで見物していたアリスが戻って来て、耳打ちするようにエリックに尋ねる。対するエリックも怪しまれない程度に小声で話す。
「いや、詳しい事はまだ何も。」
「そう。それで、これからどうするの？」
「うん、まぁ折角だからちょっと調査してみようかなって。」
「え、でも調査って言ってもあんなに人だかりが出来てるんだから、そんな簡単に近づけられないでしょ？　エリックさん、警察でも探偵でも何でもないんだし。」
「うん、だから、一旦時間を止める。」
（時間を…？　）とアリスが聞き返そうとしていた次の瞬間には、もう時が止まっていた。辺りは皆、一時停止しているかのように完全に静止しており、誰一人動いている者はいなかった。
「さぁ、アリス。早くこっちにおいで。」
呆気に取られているアリスを尻目にエリックはいつの間にか死体のすぐ側へと近付いていた。呼ばれたアリスが急いでエリックの側へと駆け寄る。
「ごらん、アリス。背中から心臓を一突きだ。この犯人は、彼を殺す事に対して随分と躊躇いが無かったようだ。」
エリックが死体に刺さっている包丁を指してアリスに語りかける。

「本当ね。でもエリックさん。確かに凶器としては、この包丁が一目瞭然な訳だけど、逆に言えば、凶器以外の犯人の手がかりになるような物が、これ以上何も無いんじゃない？」
「何を言ってるんだい、アリス？　何より大きな手がかりがここにあるじゃないか。」
「え？　でもこの包丁だけじゃこれ以上何も分からないわよ。もっと、他の人からの情報を集めるとか、この包丁がどこで買われた物で、どんな人が買っていったとか、そういう細かな情報を調べていかないと…。」
「いや、もっとストレートに調べる方法がある。こんな風に。」
エリックがポケットから何やら黄緑色の粉が入ったカプセルを取り出し、それを包丁に降りかけた。すると、しばらくして包丁にぱっちりとした目と口が現れた。アリスがたまらず声を上げる。
「な、な、な、な、何なのエリックさん。これ？　何か包丁に目と口が生えたんだけど。」
「あぁ、これは『パーソナルパウダー』といって、喋られない植物や無機物に降りかける事によって、その対象物を喋らせる事の出来る粉なんだ。」
「へ、へぇー…。」
「さて、包丁君。喋ってくれるね。」
呼ばれた包丁は、少し俯きながらゆっくりと口を開いた。
「えぇ、ですが、話す前に一つだけ。私は女性です。なので包丁君ではなく包丁さんと呼んでください。」
（いや、そこは別にいいんじゃないかな。意外とプライドが高いのね。包丁さん。てゆーか、こんな能力があったら、この世の中に推理物なんてジャンル確立しなくなるわよね。殺人事件が起きたら、凶器にこの能力を使えばいいだけの話になるし。）と、アリスは心の中でツッコんだ。
「それでは話させて頂きます。確かに、私の持ち主様は、私の体を使って人を殺すという許されない事をしました。ですが、それも致

し方のない事なのです。この男は死んで当然。それだけの事をしてきた男なのですから…。」
包丁さんが沈痛な面持ちになる。アリスは包丁さんのその表情に、ただならない事情を感じ取った。
「何か、深い事情がありそうですね。」
エリックのその言葉に、包丁さんがこくんと頷く。
「この男の名は、中川達也。二十九歳。去年まで私の持ち主様の旦那となっていた男でした。」
「え、っていう事は…。」
アリスがはっとした表情で声を上げる。
「そうです。この男を殺した犯人は、この男の元妻。旧姓、長谷川恵子。その人です。」
「なるほど。大分話が見えてきました。ならばおそらく、殺害の動機は怨恨といったところではないでしょうか。」
エリックが問い掛ける。
「はい。私の持ち主様とこの男は、十年前、大学のサークルで知り合いました。やがて大学を卒業し、地元企業に就職、しばらくして結婚と、傍から見ても充分に幸せな生活を過ごしていました。しかし、二年前にこの男の会社が倒産して、そこから全てが狂い始めたのです。男は酒に溺れ、毎晩のように私の持ち主様や三歳になる一人息子に、酷い暴力を振るいました。やがて、二人は離婚し、子供は私の持ち主様が引き取る事になりました。ようやくこれで全てが終わった。そう思った矢先、新たな悲劇が持ち主様を襲ったのです。」
「この男があなた達のもとへ、金をせびりにやってきた…ですか？」
エリックが仮説を述べる。包丁さんはその言葉に静かに頷く。
「えぇ、毎月三万。本来ならこの男が私の持ち主様達に養育費や生活費を払うのが道理であるにも関わらず、逆にこの男は、私達の所へ金を渡すよう要求してきました。」
二人は包丁さんの語る事実に沈黙している。

「男が職を失い、求職活動をしている間、持ち主様は常々申していました。『今はまだ辛い時期にいるだけ。諦めなければ必ず良い事がやってくるから。』と。それなのに、あの男はそれを裏切って…。」
怒りと悲しみに体を震わせ、言葉を詰まらせる包丁さん。二人は何も喋らない。
「お願いです。どうか、今回の出来事はあなた達二人の胸の内にだけ留めておいてもらえないでしょうか？　これでもし持ち主様が捕まって刑務所行きなんて事になったら、それこそ持ち主様が可哀想です。」
包丁さんの問い掛けにアリスがエリックの顔を見つめる。見つめられたエリックは、ひどく無表情な顔をして、すっと静かに立ち上がった。
「いや、残念ながら包丁さん。私達は警察でも探偵でもない。ただの一般人だ。だから今後の捜査の方針がどうなるか。残念ながらそれはやはり警察次第だ。力になれなくて済まない。」
包丁さんに頭を下げるエリック。一方の包丁さんはひどく残念そうな表情をしていた。
「…そうですよね。無理を言ってごめんなさい。」
「あぁ、もうすぐパウダーの効果が切れる。じゃあ、また。」
エリックがその言葉を言い終えるのと同時に、今まで静止していた世界が再び動き始めた。
「こら！　君達！　勝手に入ってきちゃ困るよ。」
銀行員の一人がエリック達に声を掛け、死体から離れるように促す。
「それじゃあアリス。買い物に行こうか。」
出口へと歩き始めるエリック。呼ばれたアリスは驚いたような表情を浮かべる。
「え、えぇ。」
こうして、二人は銀行を後にしたのだった。

第3話

「五千三百六十七円になりまーす。」
よく通るレジ員の口から発せられた会計金額を、エリックは万札一枚で支払い、お釣りを受け取った。エリックが様々な買い物品が入った袋を抱え、出口へと向かって歩き始める。するとそこへ、アリスが声を掛けた。
「ねぇ、エリックさん、ちょっとそこの喫茶店で休んでいかない？」
アリスが通路の向こう側にある喫茶店を指差す。その言葉にエリックも同意する。
「そうだね。少し休もうか。」
二人は喫茶店へ入り、窓側の四人席に席を取った。幸い、夕方の四時少し過ぎだったという事もあって店内は閑散としていた。店員を呼び、アイスコーヒーとレモンティーを注文する。（店員から見れば）一名様なのに、二人分の注文をした時は、さすがに店員から怪訝な顔をされたが、アリスのためを思い、何とか恥ずかしいのを我慢したエリックだった。しばらくして、注文のアイスコーヒーとレモンティーが置かれる。アリスがストローでレモンティーを飲んでいるところ、エリックがアリスに声を掛けた。
「…釈然としない、といった表情だね。」
その言葉に少しムッとするアリス。
「当然でしょ。エリックさんくらい色んな能力があれば、あの奥さんと包丁さんを救うだけの方法くらい、いくらでも思いつきそうなのに、エリックさん、あんなにあっさりと突き放しちゃうんだもん。もう幻滅しちゃったよ。」
頬を膨らませて黙々とレモンティーを飲むアリス。その言葉にエリックが苦笑する。
「はは。ごめんよ。ただ、あの段階ではどうしようもなかったからね。あのような対応を取るしかなかったんだよ。」

その言葉にアリスの動きが止まる。
「あの段階ではって事は、じゃあ何か助ける方法を考えているの？」
「あぁ。」
「ねぇ、どんな方法なの？　教えて。」
「それはまだ言えない。」
「えー！　どーしてよ？」
「ちょっと許可が要るからね。」
「許可？」
「そう、許可。休憩が終わったら早速その場所に行くからアリスも付いてくるといいよ。」

小一時間ほどして二人は店を出た。それから、どこかに向かって淡々と歩くエリックに対してアリスが声を掛ける。
「ねぇ、エリックさん。これからどこに行くの？」
その問い掛けに、前を進んでいたエリックが振り向く。
「『時空間移動管轄運輸局』。昔の旧友が働いている所さ。」
「それって、この世界にあるものなの？」
「いや、この世界とは違う別世界だよ。あ、そうか。ワープした方が早かったね。じゃあ早速。」
エリックが指を一本立てると、二人は一瞬の間に、どこか別の世界にワープした。気が付くとそこは、どこかの研究機関のような大きな建物の中だった。エリックが入り口近くの受付嬢に話し掛ける。
「お手数お掛けしますが、運輸局のミディアスさんにお繋ぎ願いますでしょうか。エリックと言えば分かると思います。」
「エリック様ですね。それでは少々お待ち下さい。」
受付嬢は電話を掛け、電話の相手と幾つかの言葉を交わす。やがて、三十秒ほどして、電話を切り、視線をエリックへと向けた。
「はい、確かに承りました。それでは三階の運輸局へとお進み下さいませ。」

「お手数お掛けしました。」
エリックが受付嬢に一礼する。そして、まっすぐ通路を進み、突き当たりにあるエレベーターに乗り、三階の階数ボタンを押す。しばらくしてエレベーターが三階で止まり、チンという音と共に扉が開いた。エリックが一歩前を踏み出した所でアリスが声を掛ける。
「ちょっと待ってよ、エリックさん。」
「何だい、アリス。」
「何だいじゃないでしょ。私達今からここで何をするつもりなの？　っていうか、ここは一体何をするところなの？」
「あぁ、ここはね。『時空間移動管轄運輸局』と言って、時空間移動を管轄する総合機関みたいな所さ。」
「それで？」
「今回の件に関して時空間移動の許可申請を行ないたいんだけど、折角だから丁度ここで働いている昔の旧友に頼んでみようかなって。」
「ふぅーん。」
「まぁ、詳しい事は着いてくれば分かるよ。」
それからエリックはロビーを左へ曲がり、右手側にあった大きな部屋へと入っていった。エリックが部屋へ入るのと同時に一人の男がエリックに声を掛けてきた。
「やぁエリック。久し振りだな。」
現れたのはエリックと同い年くらいの若い男だった。髪は短髪で、茶色がかっていた。全体的に端正で整った顔立ちは、爽やかなスポーツマンタイプといった印象を与える男性だった。
「急な訪問、悪かったね、ミディアス。」
「いや、いいさ。もうすぐ仕事も終わるところだったからな。おや？　そちらの妖精さんは？」
ミディアスがエリックの背後にいたアリスを覗き見る。まさか見られているとは思わなかったアリスはたじろぎ、少し後ろへ離れてしまった。

「まぁ、ちょっと色々あってね。」
「ふ〜ん……。まぁ、いい。それじゃあ、早速だけど向こうの部屋で用件を聞こうか。」
「あぁ、よろしく頼む。」
エリック他二人は別室へと向かっていった。

三階の廊下突き当たりにある多目的室。そこにエリックとミディアスが椅子に座り、アリスがテーブルに座って二人の話を聞いている。エリックがこれまでの経緯を説明し、ミディアスはそれを黙って聞いていた。エリックが一通り説明を終えると、ミディアスはテーブルに置かれているホットコーヒーを一口飲み、小さく溜め息をついた。
「なるほどな。大体の事情は分かった。しかしお前は相変わらず金にならん事を一生懸命やろうとする奴だよな。俺にはお前の生き方が理解できん。」
そう不満を漏らし、頭を掻くミディアス。
「はは、まぁ、成り行きみたいなもんでね。ある意味じゃ僕の性分だよ。」
「しかし、エリック。それに対するペナルティも勿論分かっているんだろうな？」
ミディアスが突然、鋭い眼光を向けてくる。それを受けたエリックも、途端に表情が険しくなる。
「…あぁ、勿論だ。」
ただならぬ雰囲気にアリスが口を挟む。
「え？　エリックさん、何なの、ペナルティって？」
慌てふためくアリスに対して、ミディアスが声を掛ける。
「お嬢さん。分かっているとは思うが、時空間の移動は本来許される事じゃない。何せ、どういった事情があるにせよ、時空間を移動し、過去や未来で何かをするっていう事は、他の時間軸に何らかの

影響を及ぼすっていう行為に他ならないからな。」
「…。」
アリスは沈黙する。ミディアスは構わず続ける。
「にも関わらず、こいつはこれから過去に行って、その女性を助けたいと申し出ているんだ。己に課せられるペナルティがあると分かっていながら…な。」
「そんな！　エリックさんはこれから、その人を助けに行くのよ？　それなのにペナルティが課されるなんて！　そんなのおかしいじゃない！」
不条理な事実に、たまらず声を上げるアリス。
「仕方ねぇよ。これがルールだからな。」
ぶっきらぼうにミディアスが言葉を連ねる。一方のアリスは、かなり怒りに満ちた表情でミディアスを見つめていた。
「残念だが、どんなに睨まれても解決策は無い。お前らにだけ例外を許していたら、他の奴らに示しが付かないからな。」
「じゃあ！」
アリスが一際大きな声を上げる。
「私もエリックさんと一緒に、そのペナルティっていうのを受けてあげるわよ！」
「アリス、それは…。」
エリックが静止しようとする。しかし、アリスの手がそれを拒む。
「いいのよ、エリックさん。私だって、その人を助けたいんだから。エリックさんだけにそのペナルティっていうのを受けさせる訳にはいかない。」
力のこもった瞳でミディアスを見据えるアリス。そんなアリスの表情に、ミディアスはフッと笑いながら口を開いた。
「よし、分かった。じゃあ申請内容は、今から五時間前への移動。申請目的は、女性の元交際相手の殺害阻止。ペナルティを課す対象は、お前とエリックの二人で、それでいいんだな？」
「えぇ、望む所よ。」

ミディアスの前で左手を腰に当て、右手の人差し指でミディアスを指すアリス。その様子を見て、ミディアスがすっと立ち上がる。
「じゃあ、今から申請書を発行してくるから十分程ここで待っていてくれ。」
それからミディアスは室外へと出て行った。しばらくして、アリスがエリックに申し訳無さそうに声を掛ける。
「ごめんなさいね、エリックさん。勝手に私まで割り込んじゃって。でも、私も何かあの人の役に立ちたかったから…。」
対するエリックは、いつもと変わらぬ笑顔で話しかけた。
「いや、いいんだ。こちらこそ僕自身の個人的な行動に付き合わせてしまって申し訳ないと思っていた所なんだから。ありがとう、アリス。」
「…うん。」
十数分後、申請書を持ってミディアスが戻って来た。
「ほらよ。これが申請書だ。」
アリスがミディアスから渡された申請書に目を通す。
「時空間移動について、一つだけ注意点だ。絶対に『その時間にいる同じ自分』にその存在を気付かれてはいけない。理由は簡単。時空間における存在認識に矛盾と混乱が生じてしまうからだ。一般的な事例として、ドッペルゲンガーという現象は聞いた事があるだろう？」
不意に話を振られたアリスが、困惑しながら答える。
「…え、えぇ。」
「あれは、出会った相手側としての自分。つまり今回で言えば、過去の自分が死ぬと言われているが、俺らの場合は、過去に戻った本人。つまりあんた達が死ぬ事になる。この点。くれぐれも注意してくれ。」
「わ、分かったわ。」
「とりあえず気をつけるのはそれだけだが、まだ何か質問はあるか？」

「いや、僕はないよ。アリスは？」
呼ばれたアリスはムスッとした表情で答える。
「…私も大丈夫。」
「じゃあ、もう後は好きに行ってくれて構わない。それじゃあな、エリック。アリスちゃん。幸運をお祈りしてるぜ。」
ミディアスの遠回しな嫌味にアリスはベッと舌を出した。ミディアスが手を振り、しばらくすると二人はヒュッと一瞬の間にいなくなってしまった。

最終話

気がつくと、そこは今日の午後一時少し過ぎの銀行前だった。エリックとアリスが、過去の自分達に出会わないように銀行から少し離れて待ち伏せをする。するとエリックが突然思い立ったようにアリスに話しかける。

「そういえば、アリスにまだ作戦の内容を話していなかったね。」

「あ、そういえばそうね。一体どうするの？」

「フフフ。それはね…。」

それから数分ほど、エリックはアリスに作戦の概要を説明し始めた。話を聞き終えたアリスは、またもや呆れ顔だった。

「…ホント、エリックさんって、何でもアリよね。」

「フフフ。お褒めの言葉をありがとう。あ、ほら過去の僕達が来たみたいだよ。」

「本当ね。何か過去の自分とはいえ、同じ自分を見るのは気持ちが悪いわ。」

少し離れた所でレインボーカードを翳して銀行へと入っていくエリックとアリスが見える。それからしばらくして、先程殺された男と、その妻が少しだけ時間差を置いて現れた。

「来たわよ、エリックさん。」

「よし、じゃあ行こうか。」

二人が店舗内に入る頃、妻が奇声を上げて元夫の男の元へと近付き、今にも刺し殺そうとしていた。その様子を見たエリックが急いで世界の時間を止めた。

「よし、アリス。今だ。よろしく頼む。」

「分かったわ。」

呼ばれたアリスは先程エリックが買った買い物袋の中から、押すと引っ込むジョークグッズの包丁を取り出し、それを妻の手に持っている包丁と交換した。一方のエリックは、刺されようとしている元

夫の元へと近付き、彼の背中に、先程買った赤色の絵の具の入ったビニール袋をそっと心臓裏の背中部分に貼り付けた。そこまでの作業が完了した所で一旦、エリックは時間を元通りに動かし始めた。

「死ねぇぇぇぇーーーーー！！！！！」

妻が奇声を上げながら元夫に（ジョークグッズにすり替えられた）包丁を背中に叩きつける。その瞬間を狙ってエリックが再び時間を止めた。次にエリックは、微弱な電流で元夫の意識を無くし、妻と元夫の頭をそれぞれの手で掴み、目を閉じ、何やら呪文を詠唱し始めた。

「シルケイサトリアーレ　グルファナヴェニアブラン」

呪文を唱え終えると、エリックの両手から黄色の光が迸った。先程のエリックの事前説明によると、どうやらこの呪文は、対象者の記憶を消す事の出来る呪文らしい。消した内容は、まず妻に関してはこの元夫から金を奪われ、酷い暴力を受けていたという記憶。そして元夫に関しては、その逆。この妻と子供から金を奪い、暴力を振るっていたという記憶だった。そして、少なくとも、この二人は円満に離婚し、お互いこれからは何のしがらみも確執もないように、今後を生きるという約束をしたという記憶を付け加えておいた。そして最後にエリックは、妻が殺害に使う予定だった包丁をそっと回収した。全ての作業を終え、店内を出た所でエリックは再び時を動かした。後ろから店員や客の悲鳴が聞こえる。そしてエリック達の後ろから、自分が今まで何をしていたのかよく分からない様子の妻が小走りに出てきた。

自分に出来るのはここまでだ。エリックはそう思った。こうすれば、少なくとも奥さんは殺人を起こした事にはならず、また元夫に関しても、今回の事件は誰かのつまらないイタズラだと錯覚させる事ができ、妙な疑念や怨恨を抱く事もないだろう。エリックは今回、敢えて二人がそれぞれお互いに出会ったという記憶そのものを消さな

かった。何故か？
今後、この二人が生きていく上で必要となる、様々な法律上の手続きを行なうにあたって、記憶には無い結婚暦、離婚暦が残っているというのは本人達にとっても不都合な事であり、何より奥さんの持つ子供が誰の子供なのか。奥さん自身にすら分からなくさせてしまうという大きなデメリットがあったためだった。記憶は消せても記録は消せないという、記録の厄介さがその最たる理由だった。しかし今回、エリックにはもう一つの理由があった。
それは、上手く言葉に表現出来ない感情だったが、敢えて言うなら、良い出会いも、悪い出会いも、そのどちらにも出会いの価値は平等にあると考えたためだった。悪い出会いだったからその記憶を消す。そういう判断を取る事は、実に簡単で楽な手段だと言える。しかし、その悪い出会いがなかったら、今の自分が形作られていないのもまた事実だった。出会いというのは、日一日、積み重なった地層のようなものだ。大事なのは、良い悪いを分別するのではなく、全てを等しく受け入れる事ではないか。そんな事をぼんやりと考えるエリックだった。

再び、エリックとアリスは元いた時間へと帰ってきた。辺りはすっかり日が落ちて真っ暗になっていた。
「それじゃあエリックさん。帰りましょうか。」
アリスが光る街並みを眺めながら恐る恐るエリックに尋ねた。
「それでね。エリックさん。運輸局で言ってたペナルティっていうのは一体…」
（何なの？　）とアリスが言いかけた途端、エリックがアリスの口の中へ、スプーン一杯のバニラアイスを一口突っ込んだ。バニラアイスを口の中へ入れたアリスが、それを何回か咀嚼すると、みるみるうちに顔を紅潮させていった。
「何、このバニラアイス！　辛っ！」

「それがペナルティ。」
「は？」
アリスは、訳が分からず聞き返した。
「だからそれが、今回の、過去に遡って未来を変えた者へのペナルティなんだ。つまり、今回の場合で言えば、『今日から一週間、甘いものが辛く、辛いものが甘くなる』というのが僕達に課せられたペナルティなんだ。」
「そ、それだけ？」
アリスが拍子抜けしたように聞き返す。
「いやいや、それだけって事はないよ、アリス。食は生物にとって必要不可欠な生命維持活動だからね。その中でも味覚を一週間変えられるっていうのは、実に大きなペナルティだよ。」
「だって私、ペナルティっていうから、もっと懲役とか、禁固刑とか重いものを想像していたのに…。」
「あぁ、それは過去に遡って悪行を働いた者達に対しての刑罰だよ。基本的に善行に対してのペナルティは今回のように軽いものが多いんだ。ただ、あまり頻発させると過去や未来とのバランスが崩れるから、一人ひとりに使用回数や行動範囲が制限されているのだけどね。」
エリックのその言葉にアリスが脱力する。
「なぁーんだもう。心配してソンした。って、あれ？　もしかしてエリックさんも、あのミディアスって腹立つ人も、この事を知っていたの？」
その質問に、エリックは随分としれっとした口調で答えた。
「勿論だよ。現に僕はもう何回も時空間移動を行なっていて、それに伴うペナルティも何個か経験しているしね。それに、ペナルティと言っても、実際は今回のようにギャグみたいなものがほとんどだから。まぁ、一種の罰ゲームみたいなもんだよ。」
「…じゃあ、あのミディアスって人の、やたら挑発的な対応は…。」
アリスが、頭の中に浮かんできた忌まわしい真実を前にして、少し

ずつ怒りをこみ上げさせてきた。
「…まぁ、おそらく何も知らないアリスを、面白半分でからかっていたんだろうね。ペナルティって言えば、それこそ僕が逮捕されるような、何か重大な事態に陥るかもしれないと、アリスが勝手に勘違いしてくれると踏んで。」
「どーして教えてくれなかったのよ！！！！！」
こみ上げていた怒りをついに爆発させたアリス。
「いやー。何かアリスの純粋な反応を見ていたら面白くってさ。それで、久し振りに再会した旧友と一緒に、ブラックジョークを繰り広げてみたくなったんだよ。」

ドカッ！　バキッ！

「もーっ！　ホント最っ低！　私もう先に帰るから！」
アリスがエリックをボコボコにして、一人で歩き出してしまった。
そんなアリスを見てエリックが慌てて追いかける。
「待ってって、アリス。ほら、アイスあげるから、アリスだけに。」
「やかましい！」

ネオンに光り輝く街並みを、二人は賑やかに歩いていった。
妖精と画家の不思議なコンビの物語は、まだまだこの先も騒がしく続いていくのだった。
（終）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5460m/

ラパレラ・エスタ

2010年10月11日11時03分発行